

01磐城森林計画区

阿武隈高地生物群集保護林	○平成 28 年度のモニタリング調査によれば、高木層を形成するアカマツや、コナラ、クリなどの老木は衰退傾向にあり、下層に土地的・気候的極相林となるモミやヒメコマツがやや優占して生育している状況にあるため、今後はモミ群落及びヒメコマツ群落へ遷移していくものと評価される。
赤井岳ヒノキ遺伝資源希少個体群保護林	○平成 28 年度のモニタリング調査によれば、森林調査の結果、保存対象種ヒノキは、枝枯れ・腐朽・空洞が見られる個体があったものの、樹勢は良い状態の個体が多く、林床にはヒノキの実生も多数確認され、今後もヒノキ群落またはヒノキを含む群落として維持されていくものと思われる。
木戸川コナラ希少個体群保護林	○平成 28 年度のモニタリング調査によれば、本保護林は、高齢級のコナラやモミが混生して優占している林相にある。コナラの実生や稚樹はあまり見られず、更新は難しい状態にある一方で、モミは草本層、低木層、亜高木層の各層でも見られ、今後は土地的・気候的極相林をつくるモミを主体とする群落へ遷移していくものと評価される。
津島マツ遺伝資源希少個体群保護林	

02吾妻森林計画区

黒斑山カラマツ希少個体群保護林	○平成 28 年度のモニタリング調査によれば、毎木調査の結果、樹冠を形成するカラマツに枝先枯損などが目立つが、大径木の枯損木などは見られず、概ね樹勢は良好な状態にあると考えられる。下層に後継樹が育っていないものの、当面の間はカラマツ林として維持されていくものと考えられる。
万座カラマツ希少個体群保護林	○平成 28 年度のモニタリング調査によれば、保護対象であるカラマツ群落を構成する高木層のカラマツに、樹勢の低下や枯損などは確認されず、今後もカラマツ群落として維持されていくものと考えられる。ただし、気候的極相林となるコメツガや、シラビソ、トウヒなどが亜高木層でやや発達してきており、今後はこれらの樹種が優占した林相へ推移していくものと評価される。

03埼玉森林計画区

秩父山地生物群集保護林	○平成 28 年度のモニタリング調査によれば、森林調査、植生調査の結果、前回調査と比較して大きな変化はなかったものの、前回に引続いて林床植生が貧弱な状態のままとなっており、シカ食害による影響が続いている状態にあると評価される。オオシラビソについては、枯死木の殆どが胸高直径 10cm 程度の若い個体であったため、種内競争による淘
-------------	--

	汰とも考えられるが、シカによる剥皮の被害を受けている個体数が多いため、シカによる淘汰圧が大きいと考えられる。
--	--

04 神奈川森林計画区

丹沢山地生物群集保護林	○平成 28 年度のモニタリング調査によれば、低木層以下の植被率は低く、種数が極めて少ない状況にある。草本層においてはシカの忌避植物であるシロヨメナやホソエノアザミが優占する状況にある。前回調査時から引き続いてシカによる食害の影響が強くている状態で下げ止まっている状態にある。また、その影響で、本保護林の主要な群落を形成するブナや、シデ類、カエデ類などの高木性の樹種の後継樹が育っていない状態にある。このため、シカによる食害の影響を排除しない限りは、本保護林の森林生物を保全するための基盤となるブナ群落を始めとした植生の衰退・消失を招く恐れがあると評価される。また、主木であるブナは、気象害の発生も相まって、根茎が露出していたり、立ち枯れ木や倒木が発生している。
西丹沢ブナ希少個体群保護林	○平成 28 年度のモニタリング調査によれば、神奈川県「第 3 次神奈川県ニホンシカ管理計画」によると本保護林を含む地域は、丹沢大山地域周辺の中では比較的シカの被害が少ない場所となっている。しかしながら、今回及び前回の森林調査結果によると、林床のササの被度の低下や高さの低下が認められ、シカによる食害の影響が大きくなっていることが示唆される。また、保護林内の群落を構成する主要な樹種のブナの更新も難しい状態にある。このため、シカによる食害の影響を排除しない限りは、本保護林及び周辺のブナ群落の衰退・消失を招く恐れがあると評価される。
西丹沢モミ希少個体群保護林	○平成 28 年度のモニタリング調査によれば、高木層を形成する老木のモミや、ブナ、ミズナラなどの樹勢状態は良いものの、後継樹の生育状態が悪く、また林床のスズダケの被覆が低下している状況にある。シカによる食害の影響と考えられ、今後さらに草本層植被率が低下する傾向が続くと、群落の更新が止まり、モミ群落の崩壊を招く危険性があると評価される。
箱根ヒメシャラ・ハコネコメツツジ希少個体群保護林	○平成 28 年度のモニタリング調査によれば、ヒメシャラの老齢木に樹勢低下の兆候がみられるものの、亜高層や低木層に後継樹の生育が見られる。このため、ヒメシャラの密度は低いものの、今後もヒメシャラを含む群落として維持されていくものと評価される。また、ハコネコメツツジ群落についても、周囲の低木の被覆に伴う樹勢の低下などは確認されず、良好な生育状態にあると評価される。

05 中越森林計画区

佐武流山周辺森林生態系保護地域	○平成 28 年度のモニタリング調査によれば、風衝地低木群落でオオシラビソの枯損木が多くみられるが、風衝地であ
-----------------	---

	ることによる影響と考えられる。風衝突低木林以外の本森林生態系保護地域の基盤をなすササ草原、亜高山帯低木群落、オオシラビソ群落、クロベ群落、ブナーミズナラ群落では、大きな変化は見受けられず、主要な群落に大きな問題はないと評価される。
利根川源流部・燧ヶ岳周辺森林生態系保護地域	<p>○中越森林計画区側は、平成 28 年度のモニタリング調査によれば、新潟県治山課から公表されているナラ枯れ被害本数の推移をみると、平成 24 年には通常の状態に収束しているものの、今回調査で調査プロット内に生育するミズナラは全て枯死し、後継樹も見受けられない状態にある。また、雪田植生の水位低下は、今年度雨が一時的に少なかった影響と考えられるため、大きな影響はないだろうと考えられる。上記以外のハイマツ群落、オオシラビソ群落、自然低木群落、ブナ群落については、特に問題は見受けられず、今後も良好な状態で維持されていくものと評価される。</p> <p>○利根上流森林計画区側は、平成 26 年度のモニタリング調査によれば、前回調査と比較して大きな変化は確認されていない。本保護林を代表する森林植生であるオオシラビソの優占した植物群落は、環境条件が厳しい場所に成立しているため群落の成長は悪いが、その条件に適応した形で成立している。また、より条件の厳しい場所に成立している、高山ハイデ・風衝地植物群落、雪田植物群落、ササ自然草原、湿地植物群落も、群落構造に変化は認められず、本保護林は良好な状態で維持されていると評価される。平成 28 年度のモニタリング調査によれば、風衝地低木群落でオオシラビソの枯損木が多くみられるが、風衝地であることによる影響と考えられる。風衝突低木林以外の本森林生態系保護地域の基盤をなすササ草原、亜高山帯低木群落、オオシラビソ群落、クロベ群落、ブナーミズナラ群落では、大きな変化は見受けられず、主要な群落に大きな問題はないと評価される。</p>
小松原湿原生物群集保護林	○平成 28 年度のモニタリング調査によれば、本保護林を構成する主要な要素である、湿原植生、ブナ群落、オオシラビソ群落のいずれも、特に問題となる変化は起こっておらず、今後も維持されていくものと評価される。
守門岳生物群集保護林	○平成 28 年度のモニタリング調査によれば、森林調査の結果、本保護林内の主要な群落である自然低木群落及びブナ群落において、雪害や風害の影響は見られたものの、特に今後問題となりそうな変化は見られていない。このため、保護林内の自然低木群落及びブナ群落は、今後も維持されていくものと評価される。
榎橋ブナ遺伝資源希少個体群保護林	○平成 28 年度のモニタリング調査によれば、保存対象種のブナに生育状態の悪い個体は確認されず、また後継樹となるブナの実生も少数ながら確認されていることから、現在のところ大きな問題はないと評価される。
笠掘カモシカ希少個体群保護林	○平成 28 年度のモニタリング調査によれば、本保護林に生息するカモシカの生活基盤となる主要な群落の分布状況に

	大きな変化は見受けられず、今後もカモシカの生息環境は確保されていくものと評価される。
雨生池アマゴイルリトンボ希少個体群保護林	○平成 28 年度のモニタリング調査によれば、アマゴイルリトンボは、低木が鬱蒼としておらず、草本層も適度に生育する林床環境を好む傾向があると考えられている。このため、保護林内の林床環境の管理方針としては、雨生池の水辺周辺で、木漏れ日やギャップのある場所において、低木が密生する箇所については間伐・部分伐を行い、草本層は 1m 程度を残して草刈りを行うことが望ましいと考えられると評価される。また、今後の課題として、現段階では、まだ観察数が少なく、またその時の生息密度によっては、今回アマゴイルリトンボが確認されなかった箇所でも観察される可能性もでてくると考えられるため、今後のモニタリング調査において、どの程度の許容範囲があるのかを明らかにしていく必要がある。その結果を元にして、アマゴイルリトンボの保全のためにどの程度の頻度で草刈りを行えばよいのか、どのぐらいの高さに草刈りを行えば良いのかなどの森林管理に資する資料を作成することが必要である。また、現在の調査地点は北側から東側に集中しているため、南側から西側にかけても同様の調査を行い、雨生池の周囲全体に生息適地が分布しているのかを明らかにする必要があるとされている。

06八溝多賀森林計画区

小川ブナ希少個体群保護林	○平成 24 年度のモニタリング調査によれば、前回調査と比較して大きな変化は確認されていない。保護対象種であるブナ、ミズナラ、イヌブナは、下層にも幼木や稚樹が確認されており、保護林は良好な状態で維持されている。ただし、ブナの大径木は少なく、枯損が進行していると評価される。また、シラカンバが生育する林分は、シラカンバは先駆性樹種であるため枯損が進行し、衰退傾向が読み取れる。今後は、シラカンバが減少し、コナラが優占する林に移行すると評価される。
板木リンボク・カゴノキ希少個体群保護林	○平成 24 年度のモニタリング調査によれば、平成 24 年度のモニタリング調査によれば、前回調査と比較して大きな変化は確認されていない。林内には暖帯性林を構成するウラジログシ、ヒサカキなどの生育が確認されており、保護林内は良好な状態で維持されていると評価される。また、平成 29 年度に保護林内を踏査した結果、尾根付近の急傾斜地で 15cm 程度の個体、山腹の急斜面で 20~25cm 程度のカゴノキの個体を 2 個体確認した。急傾斜地の斜面上部と斜面中部に生育が認められたため、保護林内の山腹斜面に単木的に生育するものと思われる。隣接する花園花貫県立自然公園における植物の解説によると、リンボクが生育すると書かれているため、当該地域には生育しているものと思われるが、今回の調査では、保護林内で確認されなかった。もともと生育密度の低い種であり、北限地では更に密度が低

	いと考えられるため、確認されなかった可能性もある。
和尚山ブナ希少個体群保護林	○平成 24 年度のモニタリング調査によれば、ナラ枯れの発生、倒木化などは見られず、前回調査と比較して大きな変化は確認されていない。ミズナラ、ブナの優占した温帯性林は健全に生育しており、保護林は良好な状態で維持されていると評価される。
猿ヶ城アズマシャクナゲ希少個体群保護林	○平成 24 年度のモニタリング調査によれば、保護対象種であるアズマシャクナゲの生育が確認され、アズマシャクナゲを含む植物群落は健全に生育しており、保護林は良好な状態で維持されている。ただし、アズマシャクナゲの保護林内の分布は局所的である。アズマシャクナゲの生育本数は少なく、低木層で確認された程度であるが、個体の生育状態は良好であると評価される。
西金砂スタジイ希少個体群保護林	○平成 24 年度のモニタリング調査によれば、森林調査はシラカシ群落の 2 箇所で行われている。シラカシ群落については、前回調査と比較して大きな変化は確認されておらず、照葉樹林帯と落葉樹林帯との中間的な要素を持った林分により構成され、良好な状態で維持されていると評価される。平成 29 年度に保護林内を踏査した結果、スタジイ、カゴノキは保護林内に散在している状況にあることが確認されている。
花瓶山ブナ・イヌブナ希少個体群保護林	○平成 24 年度のモニタリング調査によれば、保護対象であるブナが優占する冷温帯性林は健全に生育しており、保護林は良好な状態で維持されていると評価される。
八溝山ツガ・ダケカンバ希少個体群保護林	○平成 24 年度のモニタリング調査によれば、森林調査はブナ群落の 2 箇所で行われている。ブナ群落については、下層にブナ、ミズナラの幼木や稚樹は確認されなかったが、ブナ、ミズナラ、クリなどが混在して優占する冷温帯性林は健全に生育しており、保護林は良好な状態で維持されていると評価される。また、平成 28 年度の基礎調査によれば、保護林の南西側の尾根部において、4～5 本程度のダケカンバ成木の生育が確認されているが、枯損している個体も認められ、生育状態が懸念される状況にある。さらに、平成 29 年度に行った現地踏査によれば、八溝山が北限となっているツガについては、保護林内及び保護林隣接地に生育は認められないことが確認されている。福島県植物誌によれば、東白川郡に生育しているといった記載がある。

07 鬼怒川森林計画区

奥鬼怒生物群集保護林	○平成 24 年度のモニタリング調査によれば、シカの痕跡が多数確認されたものの、オオシラビソ群落、ダケカンバ群落、シラビソ群落、ウダイカンバ群落、高層湿原などからなる、原生林的な亜高山帯植生は健全に生育しており、保護
------------	--

	<p>林は良好な状態で維持されていると評価される。しかしながら、平成 28 年度の基礎調査によれば、シカによる剥皮、林床植生の食害、糞・足跡等の痕跡が顕著に認められるようになってきており、さらなる影響が懸念される。</p>
<p>裏見の滝コナラ遺伝資源希少個体群保護林</p>	<p>○平成 24 年度のモニタリング調査によれば、前回調査と比較して大きな変化は確認されていない。保存対象種であるコナラ、クリの成木は健全に生育しており、保護林は良好な状態で維持されている。アカマツが優占し、コナラ・クリが混在する林相にある。コナラ・クリの中低木、実生など、更新木の生育はほとんど認められない。草本層にはニッコウザサが繁茂し、植被率が 100%と極めて高いことが、コナラ、クリの更新を妨げる要因になっていると評価される。ニホンジカの痕跡はあるが、大きな影響は現れていない。また、平成 28 年度の基礎調査においても、草本層のニッコウザサは 100%の被度を保ち、シカによる大きな影響は認められていない。</p>
<p>刈込湖コメツガ遺伝資源希少個体群保護林</p>	<p>○平成 24 年度のモニタリング調査によれば、土壌層が薄く礫が多い立地に土地的極相林として成立している群落のため、枯損木や倒木は見られるものの、前回調査と比較して大きな変化は確認されていない。保存対象種であるコメツガなどの針葉樹の成木・中低木・実生は健全に生育しており、保護林は良好な状態で維持、更新されていると評価される。ニホンジカの痕跡はあるが、大きな影響は現れていない。また、平成 29 年度の調査によっても、シカによる樹皮剥ぎ、食痕、糞は確認されているが、被害の程度は小さい（植生被害レベル 1）ことが確認されている。</p>
<p>黒沢ウラジロモミ・クロベ遺伝資源希少個体群保護林</p>	<p>○平成 24 年度のモニタリング調査によれば、保護林上部の岩角地上に広がる針葉樹林は健全に生育していると評価される。ニホンジカの痕跡はあるが、大きな影響は現れていない。また、平成 29 年度の調査によっても、シカによる樹皮剥ぎ、食痕、糞は確認されているが、被害の程度は小さい（植生被害レベル 1）ことが確認されている。</p>
<p>千手ヶ原ミズナラ・ハルニシ希少個体群保護林</p>	<p>○平成 24 年度のモニタリング調査によれば、ミズナラ、ハルニシが優占する植物群落は健全に生育しており、保護林は良好な状態で維持されていると評価される。ただし、シカの食害の影響を強く受け、中低木、実生など、更新木の生育はほとんど認められていない。また、ドロノキについては、まとまって生育している林分はなく、ハルニシやヤチダモなどと共に湿潤な立地に単木状で生育している。本来、ドロノキは、氾濫原や河川沿いに出現した裸地などに出現するといった特性を有している樹木であるため、保護林内での自然更新は難しいものと評価される。さらに、奥日光の西ノ湖北岸に群落として成立しているヤチダモについては、前回調査と比較して大きな変化は確認されていない。保存対象種であるヤチダモの成木は健全に生育しており、保護林は良好な状態で維持されている。ただし、ミズナラ、ハルニシと同様に、中低木、実生など、更新木の生育はほとんど認められず、シカ食害の程度が著しいため、ヤチダモの更新</p>

	に影響を与えている可能性がある」と評価される。
西ノ湖ヒメコマツ・シロヤシオ希少個体群保護林	○平成 24 年度のモニタリング調査によれば、前回調査と比較して大きな変化は確認されていない。保存対象種の一つであるヒメコマツの成木は健全に生育しており、保護林は良好な状態で維持されている。ただし、中低木、実生など、更新木の生育はほとんど認められず、シカによる食害の程度が著しいため、ヒメコマツの更新に影響を与えている可能性がある」と評価される。なお、シカによる樹皮剥ぎで根際が腐朽しつつある株が多数確認され、斜面下部の一部では、根際にシカ避けネットが巻かれている。また、シロヤシオについては、やせ尾根に成立しているブナ・ウダイカンバ群落の一部で上層木の立ち枯れが目立ったものの、シロヤシオを含む植物群落は健全に生育しており、保護林は良好な状態で維持されていると評価される。
湯滝ミズナラ遺伝資源希少個体群保護林	○平成 24 年度のモニタリング調査によれば、前回調査と比較して大きな変化は確認されていない。保護林は防鹿柵内にあり、保存対象種であるミズナラの成木・中木は健全に生育しており、保護林は良好な状態で維持されていると評価される。ただし、低木、実生など、更新木の生育はほとんど認められていない。ミズナラの更新が停滞している理由は、防鹿柵の設置効果により林床の植被率は高く保たれており、シカによる影響が原因ではないと考えられる。
竜頭の滝カラマツ遺伝資源希少個体群保護林	○保護林隣接地にはカラマツ林が存在しており、第 1 回モニタリング調査はそこで行われている。これについて H23 委員会で検討が行われた結果、将来的に保護林範囲を拡充することも視野に入れて、第 1 回モニタリング地点で継続調査を行うとの判断がなされている。平成 24 年度のモニタリング調査によれば、前回調査と比較して大きな変化は確認されていない。保護林は防鹿柵内にあり、保存対象種であるカラマツの成木は健全に生育しており、保護林は良好な状態で維持されていると評価される。ただし、中低木、実生など、更新木の生育はほとんど認められていない。シカ食害による被害は現状では小さい。本来、カラマツは、先駆性樹種のため、更新のきっかけとなる成木の枯損、陽光地の出現など、大きな環境変化が起らない限り、保護林内での自然更新は難しいものと考えられる。 ○保護林内にカラマツの分布はほとんど見られない。保護林外の隣接地に密度高く生育している林分が認められることから、保護林隣接地、近隣生育地における生育分布状況を把握の上、保護林拡充の検討が必要である。調査プロット 2 は、保護林の拡充を前提に、モニタリング調査が継続的に実施されている。
大真名子コメツガ希少個体群保護林	○平成 24 年度のモニタリング調査によれば、枯損が進行していないコメツガ群落は、下層にコメツガの稚樹や幼木も確認され、健全に生育していることが確認されたが、保護林全体では枯損が進行し、オオシラビソ・シラビソの優占す

	る林況へと推移しているようであると評価される。
小田代湿原希少個体群保護林	○平成 24 年度のモニタリング調査によれば、陸地部の木道沿いには、路傍雑草や外来種が見られたが、湿原内は概ね良好な状態で維持されていると評価される。保護林はシカ侵入防止柵の中にあるため、当面の間はシカによる影響は受けないと考えられる。ただし、侵入防止柵の損傷などにより、今後、現れる可能性もあるため、湿原内における獣道の存在などに留意する必要がある。
唐沢コメツガ希少個体群保護林	○平成 24 年度のモニタリング調査によれば、アカヤシオ、シロヤシオを含む植物群落は健全に生育しており、保護林は良好な状態で維持されていると評価される。また、平成 29 年度の調査によれば、コメツガはウラジロモミと混生して植被率 50%程度の高木層を形成し、健全に生育していることが確認されている。ただし、シカによる林床植生の食害が著しく、1.5m 以下の低木が認められない状況にある。
光徳ハルニシ希少個体群保護林	○平成 24 年度のモニタリング調査によれば、前回調査と比較して大きな変化は確認されていない。ハルニシが優占する植物群落は健全に生育しており、保護林は良好な状態で維持されていると評価される。ニホンジカの痕跡はあるが、大きな影響は現れていない。また、平成 28 年度の基礎調査においても、草本層のニッコウザサは 100%の被度を保ち、シカによる大きな影響は認められていない。
光徳ミズナラ希少個体群保護林	○平成 24 年度のモニタリング調査によれば、ナラ枯れの発生、倒木化などは見られず、前回調査と比較して大きな変化は確認されていない。ミズナラが優占する植物群落は健全に生育しており、保護林は良好な状態で維持されていると評価される。ニホンジカの痕跡はあるが、林床はニッコウザサが繁茂し、大きな影響は現れていない。シカ剥皮防止ネットがウラジロモミに設置されている。しかしながら、平成 28 年度の基礎調査によれば、シカの影響により、草本層のササの草丈の低下、葉量減少、表土の露出が散見され、さらなる影響が懸念される。
戦場ヶ原湿原希少個体群保護林	○平成 24 年度のモニタリング調査によれば、陸地部の木道沿いには、路傍雑草や外来種が見られたが、湿原内は概ね良好な状態で維持されていると評価される。保護林はシカ侵入防止柵の中にあるため、当面の間はシカによる影響は受けないと考えられる。ただし、侵入防止柵の損傷などにより、今後、現れる可能性もあるため、湿原内における獣道の存在などに留意する必要がある。また、平成 28 年度の基礎調査においてもシカによる影響は見受けられないが、前回調査時と比べて水位が低い状態にあったため、上部にあるミズゴケの一部が黄変している状況が確認されている。
高原山イラモミ希少個体群保護林	○平成 24 年度のモニタリング調査によれば、前回調査と比較して大きな変化は確認されていない。保存対象群落であ

	<p>るイラモミの優占した植物群落は健全に生育しており、保護林は良好な状態で維持されていると評価される。ニホンジカの痕跡はあるが、大きな影響は現れていない。しかしながら、平成 28 年度の基礎調査においては、上層木に大きな変化は見られないが、林床はササが著しく減少しており、ニホンジカによる影響が増大している状況が確認され、さらなる影響が懸念される。</p>
<p>茶ノ木平ウラジロモミ希少個体群保護林</p>	<p>○平成 24 年度のモニタリング調査によれば、前回調査と比較して大きな変化は確認されていない。ウラジロモミを含む植物群落は健全に生育しており、倒木の増加は特に目立たず、保護林は良好な状態で維持されていると評価される。しかしながら、平成 29 年度の調査によれば、草本層のササは減少傾向にあり、ウラジロモミの樹皮剥ぎ被害が倍増している状況が確認されている。</p>
<p>原付ヒノキ希少個体群保護林</p>	<p>○平成 24 年度のモニタリング調査によれば、前回調査と比較して大きな変化は確認されていない。下層にはヒノキの稚樹や幼木が確認されており、保護林は良好な状態で維持されていると評価される。また、平成 29 年度のモニタリング調査によっても、シカによる食害は認められず、ヒノキの稚樹・低木が多く生育し、ゴミの不法投棄も見られず、保護林は良好な状態で維持されていると評価される。ただし、市街地に隣接し、一般道が保護林内を通過している孤立した樹林地であるため、ヒノキ群落の状況把握に加え、ゴミの不法投棄、乾燥期の火災等の社会的な影響にも注意する必要がある。</p>

08山梨東部森林計画区

<p>諏訪森アカマツ希少個体群保護林</p>	<p>○平成 24 年度のモニタリング調査によれば、前回調査と比較して大きな変化は確認されていない。保護対象であるアカマツ老齢木からなる植物群落は健全に生育しており、保護林は良好な状態で維持されていると評価される。また、平成 29 年度のモニタリング調査によれば、継続的にマツ枯れ防止剤が注入され、アカマツ老齢木は健全に生育していることが確認されている。</p>
------------------------	---

09天竜森林計画区

<p>南アルプス南部光岳森林生態系保護地域</p>	<p>○天竜森林計画区側は、平成 24 年度のモニタリング調査によれば、シラビソ、コメツガ、トウヒ等の亜高山帯性針葉樹からなる天然林は健全に生育・更新しており、保護林は良好な状態で維持されていると評価される。ただし、草本層の植被率が低く、更新木の生育はほとんど認められていない。また、高木層・亜高木層を形成する針葉樹にシカによる剥皮が多く認められ、シカの食害による影響を強く受けている。平成 29 年度のモニタリング結果によっても、シカに</p>
---------------------------	---

	<p>よる顕著な影響が確認されている。土壌の流出により根茎が露出したコメツガも確認され、今後もシカ食害より土壌の露出部分が増加した場合、根返りや倒木化が懸念される。</p> <p>○静岡森林計画区側の平成 20 年度のモニタリング調査によれば、ハイマツ群落に大きな変化はないものの、シラビソートウヒ群落においては、シカの剥皮によるシラビソの枯損木が多く、かなりの影響を受けていると評価される。シラビソの枯損木は胸高直径 5-10cm の比較的小径木の個体が多い。</p>
コガネ沢ブナ・イヌブナ遺伝資源希少個体群保護林	<p>○平成 29 年度のモニタリング調査によれば、保護林内は、ツガやモミなどの針葉樹林が広がっており、針葉樹に混ざってブナやイヌブナなどの落葉広葉樹が混生している林相にあることが確認されている。保護林内で優占するツガ群落やモミ群落に大きな変化はなく、保護対象樹木である、ツガやモミに混生して生育するブナ・イヌブナも良好な状態で生育していることが確認されている。ただし、シカによる樹皮剥ぎ被害や、林床植生の衰退が著しく、シカの食害による影響を強く受けている。</p>
岩岳山アカヤシオ・シロヤシオ希少個体群保護林	<p>○平成 24 年度のモニタリング調査によれば、アカヤシオ、シロヤシオの生育木は健全であるが、実生個体は確認されていない。これは、林床植生にシカ害が強くみられることが原因と考えられるとされている。平成 29 年度のモニタリング調査によれば、一部の区域において、シロヤシオ、アカヤシオの枯損がやや多く認められている（プロット内で 6 本、最大径 24cm）。林床は、シカの食害による影響を強く受けているものの、シロヤシオ、アカヤシオの実生は多く確認されている。</p>
瀬尻ホソバシャクナゲ希少個体群保護林	<p>○旧保護林区域のホソバシャクナゲの生育状態が不良であったため、スギ・ヒノキの間伐により林内に光を取り込み、ホソバシャクナゲの生育を促すための森林施業が実施されている。平成 29 年度のモニタリング調査では、プロット全域において、62 本のスギ・ヒノキが伐採されたため、光環境が改善し、ホソバシャクナゲは、斜面上部に最大で 2・2 程度の被度・群度で生育し、実生も斜面上部に多く生育するようになっている。ただし、斜面下部には殆どなく、谷沿いの南向き斜面は今後、先駆性植物が繁茂すると思われるため、ホソバシャクナゲは被圧を受ける可能性があると考えられる。拡充部分のホソバシャクナゲの生育地においては、今後のモニタリング調査において生育状況を明らかにしていく必要がある。</p>
川上ツガ・ハリモミ希少個体群保護林	<p>○平成 24 年度のモニタリング調査によれば、尾根筋の針葉樹林に枯損の進行が見られるものの、保護対象である、ツガなどの針葉樹を主体とした樹林に、ダケカンバやブナなどの落葉樹が所々に混在している天然性林は健全に生育・更</p>

	新しており、保護林は良好な状態で維持されていると評価される。ただし、シカによる被害、影響が懸念される。平成 29 年度の調査によれば、林床に繁茂していたスズタケがほぼ枯損しており、シカの食害による影響が顕著に現れている。また、モミやツガなどの針葉樹に葉の少ないものが認められ、衰退傾向にあるものと考えられる。
観音山スギ・シブカワツツジ希少 個体群保護林	○平成 24 年度のモニタリング調査によれば、天然林的な様相を示した高齢級のスギ植林は、前回調査と比較して大きな変化は確認されていない。保護対象である高齢級のスギが優占した天然性林は健全に生育・更新しており、保護林は良好な状態で維持されていると評価される。平成 29 年度の調査においても、良好な状態で維持されていることが確認されている。拡充区域に生育していると考えられるシブカワツツジについては、モニタリング調査時に 2 時間程度の確認調査を行ったが、現時点での生育状況は不明であった。
京丸山キョウマルシャクナゲ希少 個体群保護林	○平成 24 年度のモニタリング調査によれば、保護対象種であるシロヤシオ、キョウマルシャクナゲの成木・稚樹の生育が確認され、これらを含む植物群落は健全に生育しており、保護林は良好な状態で維持されていると評価される。ただし、キョウマルシャクナゲの保護林内の分布は局所的である。平成 29 年度の調査によれば、保護対象樹種のキョウマルシャクナゲとシロヤシオは健全な状態で生育しているものの、ニホンシカによる食害が著しく、スズタケはほぼ枯損し、林床は忌避植物のみが生育する状況にあることが確認されている。
本坂峠ヤブツバキ希少個体群保護 林	○平成 24 年度までの既設プロットはヤブツバキの生育がほとんど認められない場所に設定されていたため、平成 29 年度の調査では、200 年生といわれているヤブツバキが林立している箇所に調査プロットを移設した上で調査を実施した。その結果によれば、ほぼヤブツバキにより占められ、枯損はほとんど認められず、概ね健全に生育していると評価される。

10阿武隈川森林計画区

吾妻山周辺 森林生態系保護地域	○阿武隈川森林計画区側は、平成 25 年度のモニタリング調査によれば、前回調査と比較して大きな変化は確認されていない。本保護林を代表する森林植生であるオオシラビソの優占した植物群落は、亜高木・低木に枯損した立木が目立つものの、次世代を担う亜高木・低木が健全に生育して正常な更新が行われていると評価される。また、キタゴヨウ群落、自然ササ草原（チシマザサ群落）も健全に生育しており、保護林は良好な状態で維持されていると評価される。 ○会津森林計画区側は、平成 27 年度のモニタリング調査によれば、前回調査と比較して大きな変化は確認されていない。本保護林を代表する森林植生であるブナ、オオシラビソの優占した植物群落は、環境条件が厳しい場所に成立して
-----------------	---

	<p>いるため群落の成長は悪いが、その条件に適応した形で成立している。また、より条件の厳しい場所に成立している、高山ハイデ・風衝地植物群落、湿田・雪田植物群落、自然ササ草原も、群落構造に変化は認められず、本保護林は良好な状態で維持されていると評価される。</p>
甲子・二岐山周辺生物群集保護林	<p>○新設の保護林のため、現在までにモニタリング調査は実施されていない（平成 29 年度に基礎調査、平成 30 年度にモニタリング調査）。</p> <p>○保護林内の一部に分布しているミズメ群落（1155 よ 2）においては、平成 25 年度のモニタリング調査によれば、高木層を形成するミズメは若干枯損が進行しているものの健全に生育しているが、保護林内全域において次世代を担うミズメの低木・実生の生育は極めて少ない状況にある。ミズメの更新が行われていないのは、ミズメが崩積土に一斉発芽する性質を有した陽樹であるためであるが、現段階で生育しているミズメの成木は、種子散布のための母樹として非常に重要であると評価される。</p>
滝サワラ希少個体群保護林	<p>○平成 25 年度のモニタリング調査によれば、高木層・亜高木層はサワラが優占した状態にあり、保護対象であるサワラ群落は健全な状態で維持されていると評価される。ただし、林内の低木、草本層には次世代を担うサワラの生育がほとんど認められていない。また、伏状更新による成林の状況は確認されたが、新たな更新の状況は確認されていない。本保護林に生育しているサワラは中齢木が多く、密度が高いため、今後も進んでいくと考えられる種内競争による淘汰の段階で、伏状更新等の更新が行われていく可能性もあると考えられる。</p>
八幡岳周辺ブナ・ミズナラ希少個体群保護林	<p>○新設の保護林のため、現在までにモニタリング調査は実施されていない（平成 29 年度に基礎調査、平成 30 年度にモニタリング調査）。</p>
日山ミズナラ希少個体群保護林	<p>○平成 25 年度のモニタリング調査によれば、ミズナラの成木には病虫害もなく、ミズナラ成木は健全に生育しているが、林内には、次世代を担うミズナラの低木・稚樹はほとんど認められていない。また、生育しているミズナラは直径が太く高齢・老齢木であるため側芽による更新もなく、自然状態でのミズナラ林としての更新は難しいものと評価される。</p>
深沢ヒノキアスナロ希少個体群保護林	<p>○平成 25 年度のモニタリング調査によれば、高木層を構成するヒノキアスナロに若干の枯損が見られ、高木層でヒノキアスナロと競合する高木類が多いものの、林内の亜高木、低木、草本層には次世代を担うヒノキアスナロの生育が認められ、保護対象であるヒノキアスナロ群落は健全な状態で維持されていると評価される。ただし、天狗巣病の発症が</p>

	認められており、ヒノキアスナロ群落は単純な植生のため、天狗巢病の被害拡大が懸念されると評価される。
増沢モミ希少個体群保護林	○平成 25 年度のモニタリング調査によれば、高木層を構成するモミに若干の枯損の進行が見られるものの、高木層はモミが優占した状態にあり、また、林内の亜高木、低木、草本層には次世代を担うモミの生育が認められ、保護対象であるモミ群落は健全な状態で維持されていると評価される。

11 西毛森林計画区

上野檜原シオジ等生物群集保護林	○平成 25 年度のモニタリング調査によれば、高木層・亜高木層においてシオジと同様の立地に生育する落葉高木が比較的多く生育してシオジと競合する状況にあるものの、シオジが優占して生育し、上層木のシオジは健全な状態で維持されている。しかしながら、林内の低木、草本層には、次世代を担うシオジの生育は少ない状況にある。上層などからの種子供給により自然更新のきざしは認められるが、発芽個体、実生、稚樹がニホンシカにより食害されている可能性が高いと考えられる。このまま、シカによる林内植生の過食圧が継続し、群落の更新が進行しない場合、シオジ群落として存続できなくなる可能性もあると評価される。
天丸山ヒノキ・ハコネコメツツジ希少個体群保護林	○平成 25 年度のモニタリング調査によれば、高木層・亜高木層において競合する常緑針葉樹の生育は少なくヒノキが優占して生育し、上層木のヒノキは健全な状態で維持されている。しかしながら、林内の低木、草本層はシカの食害による壊滅的な影響を受け、次世代を担うヒノキの生育も少ない状況にある。このまま、シカによる林内植生の過食圧が継続し、群落の更新が進行しない場合、ヒノキ群落として存続できなくなる可能性もあると評価される。もう一方の保護対象種であるハコネコメツツジは、天丸山山頂の岩角地に生育し、露岩率が高いため、競合する種類は少なく、健全に生育している。

12 千葉南部森林計画区

元清澄山ツガ・ヒメコマツ遺伝資源希少個体群保護林	○平成 25 年度のモニタリング調査によれば、尾根部においてはモミとツガが混交するモミ・ツガ林が分布し、斜面部においては、アラカシ、ウラジロガシ、ツクバネガシなどのカシ類が優占した常緑広葉樹林が分布しており保護対象群落であるモミ・ツガ・カシ類混交群落は健全な状態で維持されていると評価される。また、ヒメコマツについては、林木遺伝資源の保存のための個別個体管理が、千葉県、東大演習林、千葉森林管理事務所からなるヒメコマツ保全協議会により実施され、保全が図られていると評価される。ただし、本保護林の主要構成木であるモミ、ツガ、ヒメコマツなどの常緑針葉樹については、枯損個体や梢端枯損した個体が見受けられるため、特に、これらの針葉樹の活力状態に留
--------------------------	--

	<p>意した監視を行っていくことが必要である。キヨスミミツバツツジについては、本調査では詳細な情報については収集していないため、生育個体数や個別個体の生育状態については不明な点が多い。保護林全体に、ニホンシカの糞や角研ぎ痕が多い。また、特定外来生物であるキョンの足跡、イノシシによる土の掘り返し痕も見られ、植生に与える影響が顕著に現れ、急傾斜面においては根返り木や倒木が比較的多く生じている。</p>
南房総モミ希少個体群保護林	<p>○平成 25 年度のモニタリング調査によれば、高木層はモミが優占した状態にあり、また、第 2 高木層や亜高木においては、ウラジロガシ、アラカシなどのカシ類が優占した状態にあり、保護対象群落であるモミ・カシ混交群落の上層木は健全な状態で維持されている。しかしながら、林内の低木、草本層はシカの食害による壊滅的な影響を受け、次世代を担うモミ・ウラジロガシ・アラカシなどの低木や稚樹は全く見られない状況にある。このまま、シカによる林内植生の過食圧が継続し、群落の更新が進行しない場合、モミ・カシ類混交群落として存続できなくなる可能性もあると評価される。さらには、林床の植被率の低下により、急傾斜地では根の露出が進行しており、このまま裸地化が進行していくと、斜面崩壊に及ぶ危険性もあるものと評価される。</p>

13 下越森林計画区

朝日山地森林生態系保護地域	<p>○平成 25 年度のモニタリング調査によれば、前回調査と比較して大きな変化は確認されていない。本保護林を代表する森林植生であるブナの優占した植物群落は、低標高地から高標高地にわたって分布し、次世代を担う亜高木・低木も含め、健全に生育して正常な更新が行われ、保護林は良好な状態で維持されていると評価される。なお、第 2 回目モニタリング基礎調査で報告されているミズナラの枯損の目立つ地点（保護林外）以外で、目立ったナラ枯れ発生箇所は確認されていない。</p>
飯豊山周辺森林生態系保護地域	<p>○下越森林計画区側は、平成 25 年度のモニタリング調査によれば、前回調査と比較して大きな変化は確認されていない。本保護林を代表する森林植生であるブナの優占した植物群落は、低標高地から高標高地にわたって分布し、次世代を担う亜高木・低木も含め、健全に生育して正常な更新が行われ、保護林は良好な状態で維持されていると評価される。また、稜線付近に成立している、自然低木群落、ミヤマナラ群落、ササ自然草原についてもブナ群落と同様に、良好な状態で維持されていると評価される。</p> <p>○会津森林計画区側は、平成 27 年度のモニタリング調査によれば、前回調査と比較して大きな変化は確認されていない。本保護林を代表する森林植生であるブナ、ダケカンバの優占した植物群落は、環境条件が厳しい場所に成立してい</p>

	<p>るため群落の成長は悪いが、その条件に適応した形で成立している。また、より条件の厳しい場所に成立している、自然低木群落、雪田植物群落も、群落構造に変化は認められず、本保護林は良好な状態で維持されていると評価される。</p>
越後山脈生物群集保護林	<p>○平成 25 年度のモニタリング調査によれば、前回調査と比較して大きな変化は確認されていない。本保護林を代表する森林植生であるブナの優占した植物群落は、低標高地から高標高地にわたって分布し、次世代を担う亜高木・低木も含め、健全に生育して正常な更新が行われ、保護林は良好な状態で維持されていると評価される。</p>
赤谷山スギ遺伝資源希少個体群保護林	<p>○平成 25 年度のモニタリング調査によれば、高木層・亜高木層に生育するスギは健全に生育し、また、林内には、次世代を担う、スギの中木・低木・稚樹・実生の生育も認められ、本保護林の設定目的である、裏日本型東北・北海道型における天スギの遺伝資源の保存に問題は生じていないと評価される。ただし、ツキノワグマによる樹皮剥ぎ被害が顕著である。このまま、樹皮剥ぎ圧が継続していくと、スギの活力に問題を引き起こしていくことが予想されるため、さらなる被害を防止するための早急な樹皮剥ぎ防止対策の検討が必要である。平成 25 年度のモニタリング結果では、胸高直径 18cm 以上のスギ 28 本中、樹皮剥ぎが見られたのは 14 本（半数）。幹周に対する樹皮剥ぎの程度は、幹周 20～40%程度が剥がれているものが多い。</p>
俎倉山スギ希少個体群保護林	<p>○平成 25 年度のモニタリング調査によれば、高木層でスギと競合する高木類が多いものの、林内の亜高木、低木層には次世代を担うスギの生育が認められ、保護対象であるスギ群落は健全な状態で維持されていると評価される。ただし、ツキノワグマによる樹皮剥ぎ被害の発生が認められている。</p>
大久蔵トチノキ遺伝資源希少個体群保護林	<p>○平成 25 年度のモニタリング調査によれば、高木層に生育するトチノキは健全に生育し、また、林内には、次世代を担う、トチノキの中木・低木・稚樹・実生の生育も認められ、本保護林の設定目的である、裏日本型東北・北海道型におけるトチノキの遺伝資源の保存に問題は生じていないと評価される。ただし、保護林内のトチノキは老齢木が散在する程度でありトチノキの現存量は少ない。</p>
白山ケヤキ遺伝資源希少個体群保護林	<p>○平成 25 年度のモニタリング調査によれば、高木層・亜高木層に生育するケヤキは健全に生育し、また、林内には、次世代を担う、ケヤキの実生の生育も認められ、本保護林の設定目的である、裏日本型東北・北海道型におけるケヤキの遺伝資源の保存に問題は生じていないと評価される。ただし、ニホンジカの生育密度が高いようで、各所で糞や匂いが確認されているため、ケヤキ稚樹の生育に影響を及ぼしている可能性がある。</p>
目指岳コウヤマキ遺伝資源希少個	<p>○平成 25 年度のモニタリング調査によれば、保護林内の上層に生育しているコウヤマキは数本と生育量は少ないもの</p>

体群保護林	の、現時点では健全に生育している。また、次世代を担うコウヤマキの低木や実生・稚樹は、コウヤマキ成木の林下にしか見られないが健全に生育している。このため、本保護林の設定目的である、裏日本型東北・北海道型におけるコウヤマキの遺伝資源の保存に問題は生じていないと評価される。保護対象樹種であるコウヤマキは現段階では健全に生育しているものの、生育は尾根に限られ、現存量が極めて少ない状況にある。一方で、保護林境界に接する福島県側の支尾根や、同じく福島県側の近隣地には、比較的まとまった面積でコウヤマキの群落が分布していることを確認している。このため、保護林拡張の可能性を検討する必要がある（保護林に隣接した福島県側の群生地）。
猿ヶ城岩オオフジシダ 希少個体群保護林	○平成 25 年度のモニタリング調査によれば、保護対象種であるオオフジシダの生育が確認された場所は限られるが、生育地では群生して生育し、保護林内のオオフジシダ群落は健全な状態で維持されていると評価される。ただし、保護林内におけるオオフジシダの生育地は、保護林外（国有地の河川管理区域）に連続して広がっており、むしろ、生育地の中心は、より湿潤な環境条件にある保護林外の河川へと繋がる凹型斜面地である。保護林内における生育地は、山腹平衡斜面のスギ植林下～その林縁部である。 ○保護対象種の一つであるコバノイシカグマやウスヒメワラビについては今までのモニタリング調査では未確認である。

14富士川中流森林計画区

上佐野スギ・ブナ・イヌブナ希少個体群保護林	○平成 25 年度のモニタリング調査によれば、保存対象種であるスギの精英樹や、高齢級のブナやイヌブナなどの上層木は健全な状態で生育している。しかしながら、林内の低木、草本層はシカの食害による影響が著しく、林床植生が衰退し、次世代を担うスギ、ブナ、イヌブナなどの稚樹や実生も少ない状況にある。このまま、シカによる林内植生の過食圧が継続し、群落の更新が進行しない場合、スギ群落やイヌブナ群落として存続できなくなる可能性もあると評価される。
-----------------------	---

15静岡森林計画区

南アルプス南部光岳 森林生態系保護地域	○天竜森林計画区側は、平成 24 年度のモニタリング調査によれば、シラビソ、コメツガ、トウヒ等の亜高山帯性針葉樹からなる天然林は健全に生育・更新しており、保護林は良好な状態で維持されていると評価される。ただし、草本層の植被率が低く、更新木の生育はほとんど認められていない。また、高木層・亜高木層を形成する針葉樹にシカによる剥皮が多く認められ、シカの食害による影響を強く受けている。平成 29 年度のモニタリング結果によっても、シカに
---------------------	--

	<p>よる顕著な影響が確認されている。土壌の流出により根茎が露出したコメツガも確認され、今後もシカ食害より土壌の露出部分が増加した場合、根返りや倒木化が懸念される。</p> <p>○静岡森林計画区側の平成 20 年度のモニタリング調査によれば、ハイマツ群落に大きな変化はないものの、シラビソートウヒ群落においては、シカの剥皮によるシラビソの枯損木が多く、かなりの影響を受けていると評価される。シラビソの枯損木は胸高直径 5-10cm の比較的小径木の個体が多い。</p>
安倍峠オオイタヤメイゲツ希少個体群保護林	<p>○平成 25 年度のモニタリング調査によれば、高木層を形成するオオイタヤメイゲツに若干の枯損が見られたが、高木層～亜高木層までオオイタヤメイゲツが優占した状態にあり、オオイタヤメイゲツの大木も良好な状態で生育していることから、保護対象であるオオイタヤメイゲツ群落の上層木は健全な状態で維持されていると評価される。しかしながら、林内の低木、草本層はシカの食害による壊滅的な影響を受け、次世代を担うオオイタヤメイゲツの生育は少ない状況にある。このまま、シカによる林内植生の過食圧が継続し、群落の更新が進行しない場合、オオイタヤメイゲツ群落として存続できなくなる可能性もあると評価される。また、シカの食害による林床植生の衰退により、裸地化の進行に伴う土壌流出、さらには、それが引き金となり、斜面崩壊に及び危険性もあるのではないかと考えられる。</p>

16奥久慈森林計画区

八溝山シロヤシオ希少個体群保護林	<p>○平成 25 年度のモニタリング調査によれば、本保護林は、ミズナラが優占して生育する林相にあり、保存対象樹種であるアカシデは、ミズナラ林の一部の林分に僅かに混在している程度でしかない。また、ケヤキについても保護林内の谷地形の一部に生育しているに過ぎない状況にある。このため、本保護林内でのアカシデ・ケヤキの林木遺伝資源の保存には難題を伴うと評価される。本保護林の尾根部には、樹形の大きなシロヤシオの群落が認められるため、保護林の設定目的をシロヤシオ群落の保護に変更。尾根上に成立しているシロヤシオ群落は、亜高木層にシロヤシオが優占し、ほぼ純林の様相を呈し、生育状態は良好である。</p>
------------------	--

17那珂川森林計画区

大佐飛山地生物群集保護林	<p>○平成 26 年度のモニタリング調査によれば、本保護林には、日本海側を特徴づけるブナ林や、林床植生としてチシマザサの繁茂、屋根地形に多いアスナロ林の存在、ダケカンバ群落の下降現象などの特徴的な群落が分布し、保護対象群落である日本海側と太平洋側の推移地帯の植物群落は健全な状態で維持されていると評価される。</p>
尚仁沢生物群集保護林	<p>○平成 26 年度のモニタリング調査によれば、本保護林内には、保護対象群落であるブナ・イヌブナ林が良好な状態で</p>

	生育し、保護対象植物群落は健全な状態で維持されていると評価される。ただし、保護林内の多くはミズナラ群落が進め、保護対象群落であるブナ・イヌブナ林は、天然記念物に指定された『長期森林動態調査区』に認められる程度であると思われる。
那須街道アカマツ遺伝資源希少個体群保護林	○平成 26 年度のモニタリング調査によれば、松枯れ対策が既に行われており、ほとんどのアカマツに松枯れ防止剤が注入されている。また、既に枯損したアカマツを伐採したと思われる切り株がところどころにみられる。このため、保存対象樹種であるアカマツの高木・亜高木は、健全に生育し、遺伝資源保全上の大きな問題は生じていない。しかし、一部に活力の低下したアカマツが見られことや、林内に中木・低木の生育はないため、樹林の更新は行われていないものと判断される。低木層、草本層では他種が繁茂しており、アカマツ実生の生育を被圧しているため、仮に高木の枯損によるギャップが生じてもアカマツの更新は見込みが薄いと評価される。また、管理の手を緩めれば、将来的にはコナラ林へと推移していくと考えられる。
流石山・大峠ミヤマナラ希少個体群保護林	○平成 26 年度のモニタリング調査によれば、本植物群落保護林の核をなす流石山・大峠周辺の山頂稜線域には、ミヤマナラ群落やハイマツ群落などの風衝地低木群落を主体に、高山ハイデ及び風衝草原、ササ自然草原、雪田草原からなる多彩な植物群落が分布しており、保護対象群落である山頂稜線域の亜高山帯植生は健全な状態で維持されていると評価される。

18利根上流森林計画区

利根川源流部・燧ヶ岳周辺森林生態系保護地域	○中越森林計画区側は、平成 28 年度のモニタリング調査によれば、新潟県治山課から公表されているナラ枯れ被害本数の推移をみると、平成 24 年には通常の状態に収束しているものの、今回調査で調査プロット内に生育するミズナラは全て枯死し、後継樹も見受けられない状態にある。また、雪田植生の水位低下は、今年度雨が一時的に少なかった影響と考えられるため、大きな影響はないだろうと考えられる。上記以外のハイマツ群落、オオシラビソ群落、自然低木群落、ブナ群落については、特に問題は見受けられず、今後も良好な状態で維持されていくものと評価される。 ○利根上流森林計画区側は、平成 26 年度のモニタリング調査によれば、前回調査と比較して大きな変化は確認されていない。本保護林を代表する森林植生であるオオシラビソの優占した植物群落は、環境条件が厳しい場所に成立しているため群落の成長は悪いが、その条件に適応した形で成立している。また、より条件の厳しい場所に成立している、高山ハイデ・風衝地植物群落、雪田植物群落、ササ自然草原、湿地植物群落も、群落構造に変化は認められず、本保護林
-----------------------	--

	<p>は良好な状態で維持されていると評価される。平成 28 年度のモニタリング調査によれば、風衝地低木群落でオオシラビソの枯損木が多くみられるが、風衝地であることによる影響と考えられる。風衝突低木林以外の本森林生態系保護地域の基盤をなすササ草原、亜高山帯低木群落、オオシラビソ群落、クロベ群落、ブナーミズナラ群落では、大きな変化は見受けられず、主要な群落に大きな問題はないと評価される。</p>
<p>栗原川ウダイカンバ遺伝資源希少 個体群保護林</p>	<p>○平成 26 年度のモニタリング調査によれば、保護林内のウダイカンバは、多くのものに樹勢が衰えている様子はなく、当面はウダイカンバ林として維持されるものと思われる。混生するダケカンバの方が衰退傾向が強く、倒木が多く見られる。次世代を担うウダイカンバの亜高木、低木、稚樹が全く見られず、亜高木層以下には、次世代を担う、シナノキ、ミズメなどが控えており、将来的には、他の樹種が優占する林に遷移していくと評価される。また、保護林内の全体的に、林床はスズタケが被度・群度 4・4 程度に繁茂しているが、シカ食害により、葉量が著しく少ない状態にある。</p>
<p>谷川岳サワグルミ遺伝資源希少個 体群保護林</p>	<p>○平成 26 年度のモニタリング調査によれば、サワグルミの高木・亜高木は、健全に生育している。このため、遺伝資源保全上の大きな問題は生じていないが、林内に中木・低木の生育は少ないため、樹木の更新は行われていないものと判断される。低木層、草本層では他種が繁茂しており、サワグルミ実生の生育を被圧しているため、仮に高木の枯損によるギャップが生じてもサワグルミの更新は見込みが薄いと評価される。更新には、大規模出水などによる斜面崩壊が必要と考えられる。</p>
<p>武尊山シラカンバ遺伝資源希少個 体群保護林</p>	<p>○平成 26 年度のモニタリング調査によれば、保護林内のシラカンバは、多くのものに樹勢の衰えや枯損が目立ち始めている。当面はシラカンバ林として維持されるものと思われるが、次世代を担うシラカンバの亜高木、低木、稚樹が全く見られず、今後、シラカンバは消失し、他の樹種が優占する林に遷移していくと評価される。また、本保護林に隣接するスキー場・キャンプ場敷地内のシラカンバは、直径が保護林内のものと同程度のため、同時期に成立したものと考えられる。ここのシラカンバは、下層が整理されているため樹勢が良い。保護林内のシラカンバは、林内に生育する落葉高木との競合が著しいため、光合成量が減少し、枯死に至っているものと考えられる。</p>
<p>玉原アスナロ希少個体群保護林</p>	<p>○平成 26 年度のモニタリング調査によれば、保護林内にはアスナロの純林が成立しているが、若齢から中齢木が多いため生育密度が高く、高木層・亜高木層において種内競争が行われており、樹勢の弱い生育不良の個体が淘汰されている状態にある。このため、林内はアスナロの枯損木がやや多くなっている。今後もこの種内競争による淘汰が行われ、本アスナロ林は、中齢から高齢木からなる林相に変化していくものと思われる。</p>

法師クロベ希少個体群保護林	○平成 26 年度のモニタリング調査によれば、保護対象樹種であるクロベに病虫害、気象害、虫害、動物被害等は見受けられず、現段階では健全に生育している。また、次世代を担うクロベの低木・稚樹は少ないが、草本層も繁茂し、シカの食害による影響は現れていないため、保護対象群落であるクロベ群落は健全な状態で維持されていると評価される。
---------------	--

19上越森林計画区

犬ヶ岳ホンシャクナゲ希少個体群保護林	○平成 26 年度のモニタリング調査によれば、本保護林内におけるホンシャクナゲの分布は、風衝地低木林が広がる犬ヶ岳～サワガニ山までは、クロベやハイマツ低木の林下や、アカミノイヌツゲ、ナナカマド低木に混じり、比較的密度高く生育しているが、サワガニ山を超えると、オオシラビソやダケカンバの亜高木林が見られるようになり、ホンシャクナゲは、オオシラビソ樹冠下や、株立木の根元などのササの密度が薄いところの林下に僅かに生育しているに過ぎない状況にある。このように、保護対象種であるホンシャクナゲの生育量は全体的には少ないが、保護林の北部を中心に比較的多く生育している状況が確認され、また、稚樹から高さ 1m 程度のものまで生育していることから、現時点では特に問題はなく、健全に生育していると評価される。
蓮華ライチョウ希少個体群保護林	○平成 25 年度の基礎調査において、保護林東部の稜線を踏査した結果、小蓮華東部の緩斜面にメス 1 羽と雛 5 羽の親子が確認された。また、登山者からの聞き取りから、小蓮華西部、小蓮華山頂部、乗鞍岳山頂付近（保護林外）でもライチョウの生息が確認された。確認された場所から、ライチョウにとって好適な環境は、傾斜のゆるい尾根上のがれ場にハイマツ群落と高山荒原雪田群落がパッチ状に分布している場所と思われた。 ○平成 26 年度のモニタリング調査によれば、ハイマツ群落は、群落高が低いものが多く、ライチョウの繁殖環境として好適な状態が保たれていると考えられる。また、ハイマツ群落に接して、高山ハイデ・風衝草原、雪田草原、高茎草原、風衝低木林、ガレ場など、ライチョウの採餌、休息、砂浴びの場となる環境が分布しており、多様な植生環境を必要とするライチョウの生息環境は良好に保たれていると評価される。平成 25 年度の概況調査、平成 26 年度の本調査において、調査範囲とした、白馬大池～三国境への稜線部において、5～6 羽のライチョウの生息が確認され、ライチョウは健全に生息していると評価される。ただし、ライチョウの天敵となる、テン、キツネの糞が確認されていることから、今後は、これらの天敵の個体数増加とライチョウの生息個体数の増減に留意し、ライチョウについては定量的な調査を行っていく事も必要と考えられる。
火打山周辺ライチョウ希少個体群	○平成 26 年度のモニタリング調査結果の概要は次のとおり。

保護林

- ① 保護対象種であるライチョウは、成鳥♂1 個体が確認された。個体数は少ないものの、生息していることは確実である。また、ライチョウの天敵となる、キツネ、テンの糞が確認された。
- ② 群落高の低いハイマツ群落は山頂周辺にわずかしかない。このため、ライチョウはミヤマハンノキの根元やタカネノガリヤス群落の中でも営巣している可能性があると思われる。
- ③ 「二万年の軌跡を生きた鳥 ライチョウ」より、ライチョウの繁殖が可能と考えられる当地域の植物群落は次のとおり。タカネノガリヤス群落(150-F03)：火打山周辺に最も多く広がる草本群落。枯草の中にライチョウが営巣できる可能性がある。時折コケモモやガンコウランなどの雪田植生が見られる。餌場としての利用も期待できる。ハイマツ群落(低)(150-F06)：火打山山頂付近など限られた場所にしか存在しない。高さ 1m 以内であり、ところによって 50cm 程度の場所もある。営巣に利用可能な区域。ハクサンシャクナゲ群落(150-F07)：周囲のハイマツやミネヤナギ、ミヤマハンノキ群落に比して群落高が低く、営巣に利用できる可能性がある。ミヤマハンノキ群落(150-F09)：下層に餌となりそうな植物はないが、倒伏した幹の下などは営巣に利用できる可能性がある。ダケカンバ群落(150-F10)：下層に餌となりそうな植物はないが、倒伏した幹の下などは営巣に利用できる可能性がある。
- ④ 一方で、群落高が高過ぎて営巣に不適な環境は、ハイマツ群落(高)(150-F01)、ミネヤナギ群落(150-F02)、ナナカマド群落(150-F08)である。
- 火打山から影火打の区間は、ライチョウの生息に必要とされる環境が極めて少なく、また、それぞれの要素が距離的に離れており、生息に十分な環境が維持されているとは言えない。焼山はハイマツの樹高が低く、風衝矮生低木群落(高山ハイデ)、風衝草原も広がり、火打山～影火打とは違った環境が形成されている。ライチョウの主要な生息環境となっている可能性があると考えられるが未確認である。調査範囲とした、火打山～影火打の稜線部において、1 羽のライチョウの生息が確認され、少ないながらもライチョウは生息していると評価される。焼山における生息状況は未確認。ただし、ライチョウの天敵となる、テン、キツネの糞が確認されていることから、今後は、これらの天敵の個体数増加とライチョウの生息個体数の増減に留意し、ライチョウについては定量的な調査を行っていく事も必要と考えられる。また、近年、温暖化による少雪の影響で、火打山山頂部付近においてイノシシの進出が確認され、高山植物の食害が懸念されている。

20多摩森林計画区

高尾山モミ希少個体群保護林	<p>○飛び地指定である保護林区域（251 ろ）は、平成 26 年度のモニタリング調査によれば、高木層に多くのモミが生育し、亜高木層以下の各階層にもモミが生育し、モミ林としての更新準備は整っているものと判断される。このため、将来的には、保護対象樹種であるモミは存続し、モミ群落として維持されていくものと評価される。</p> <p>○核となる保護林区域（238 に）は、平成 26 年度のモニタリング調査によれば、モミが密度高く生育している林分では、高木層に生育する高齢から老齢のモミに枯損が進行し、また、亜高木層以下はカシ類が支配しており、モミは存在しない。若齢のモミは草本層に稚樹・実生が僅かに見られるのみであり、モミ林としての更新準備は整っていないものと判断される。このため、将来的には、保護対象樹種であるモミは衰退し、常緑広葉樹であるシラカシ、ウラジロガシ、アラカシなどがより優勢となり、常緑カシ林へと推移していくものと評価される。</p>
---------------	---

20多摩森林計画区

愛鷹山生物群集保護林	<p>○平成 26 年度のモニタリング調査によれば、高木層・亜高木層に生育するブナやスギ、尾根筋に分布しているアシタカツツジは健全に生育し、本保護林の設定目的である、ブナ・スギ・アシタカツツジの遺伝資源の保存に問題は生じていないと評価される。ただし、ニホンシカの生息密度が高いため、実生は生育しても、稚樹・低木への成育は妨げられ、更新樹種の生育に影響を及ぼしている可能性が高いと考えられる。</p>
富士山生物群集保護林	<p>○大沢崩れの左岸にある、標高 1,500~2,800m に位置する保護林の西側の区域は、平成 26 年度のモニタリング調査によれば、高木層・亜高木層に生育するカラマツ、ウラジロモミ、イラモミは健全に生育し、カラマツ、イラモミ、ウラジロモミの遺伝資源の保存に問題は生じていないと評価される。ただし、ニホンシカの生息密度が高いため、実生は生育しても稚樹・低木への成育は妨げられ、更新樹種の生育に影響を及ぼしている可能性が高いと考えられる。</p> <p>○富士山の南側にあり、標高 1,500m~2,300m に位置する保護林の中央部の区域は、平成 26 年度のモニタリング調査によれば、垂直分布に応じて、カラマツ群落、シラビソ群落、ウラジロモミ群落からなる様々なタイプの針葉樹天然林が形成されている。このため、針葉樹天然林の維持に問題は生じていないと評価される。ただし、ニホンシカの生息密度が高いため、実生は生育しても、稚樹・低木への成育は妨げられ、更新樹種の生育に影響を及ぼしている可能性が高いと考えられる。</p>

	<p>○富士山の南東側にあり、標高 1,400~1,500m に位置する保護林の南東側の区域は、平成 26 年度のモニタリング調査によれば、高木層に生育しているブナやミズナラの生育量は少なく、また、老齢木のブナについては枯損が進行し、植生の動態が顕著に認められる林相となっている。富士山におけるブナ帯の垂直分布域は、標高 900m から 1600m の範囲にあり、それより上部では針葉樹林帯へと移行する。本区域は、ブナ帯の上部にあたるため、ブナやミズナラの生育量は低標高地と比べて少ないことが推察される。このため、ブナ、ミズナラ等の落葉広葉樹を主とする天然林の維持には問題が生じていると評価されるが、低山帯上部における植生の動態を把握できる重要な保護林であると評価される。</p> <p>○丸尾（まるび）と呼ばれる富士山の溶岩流跡地上に成立しているヒノキ群落は、平成 26 年度のモニタリング調査によれば、高木層・亜高木層に生育するヒノキは健全に生育し、ヒノキの遺伝資源の保存に問題は生じていないと評価される。ただし、ニホンジカの生息密度が高いため、実生は生育しても、稚樹・低木への成育は妨げられ、更新樹種の生育に影響を及ぼしている可能性が高いと考えられる。また、溶岩流上の土壌の薄い特殊な環境条件下に成立しているヒノキ群落の植物群落保護林としての観点からは、調査プロット 2 などのように現在の段階で中径木が密生して生育している林分では、今後は、種内競争による淘汰が活発化してくると考えられる。</p>
<p>富士山罫塚ウラジロモミ希少個体群保護林</p>	<p>○平成 26 年度のモニタリング調査によれば、高木層においては、針葉樹であるウラジロモミと、落葉樹であるサワグルミ、ブナなどが競合しつつ生育し、本保護林の特徴である針広混交林が形成されている。このため、本保護林の設定目的である、針広混交林の維持に問題は生じていないと評価される。本保護林では、ブナ老齢木の枯損が認められることから、今後は、常緑針葉樹であるウラジロモミがより優勢となり、ウラジロモミ林へと推移していくものと考えられる。しかし、ニホンジカの食害が著しいため、林下のウラジロモミ低木、稚樹・実生は僅かであり、植生の動態を妨げていると推察される。</p>
<p>富士山六番ブナ希少個体群保護林</p>	<p>○平成 26 年度のモニタリング調査によれば、高木層においては、老齢のブナ・ケヤキと、カエデ類であるメグスリノキ、オオモミジ、オニイタヤなどが混在して生育し、本保護林の特徴であるブナとカエデ類が混在した混交群落形成されている。このため、本保護林の設定目的である、ブナ・カエデ類の混交群落の維持に問題は生じていないと評価される。しかし、シカ侵入防止柵の柵内外における植生調査の結果、柵内では林床植生の回復が進んでいることが確認されている。このことから、シカの食害が林床植生を衰退させ、本群落の更新木の生育を阻害していることは明らかであ</p>

	ると評価される。
--	----------

22会津森林計画区

吾妻山周辺森林生態系保護地域	<p>○阿武隈川森林計画区側は、平成 25 年度のモニタリング調査によれば、前回調査と比較して大きな変化は確認されていない。本保護林を代表する森林植生であるオオシラビソの優占した植物群落は、亜高木・低木に枯損した立木が目立つものの、次世代を担う亜高木・低木が健全に生育して正常な更新が行われていると評価される。また、キタゴヨウ群落、自然ササ草原（チシマザサ群落）も健全に生育しており、保護林は良好な状態で維持されていると評価される。</p> <p>○会津森林計画区側は、平成 27 年度のモニタリング調査によれば、前回調査と比較して大きな変化は確認されていない。本保護林を代表する森林植生であるブナ、オオシラビソの優占した植物群落は、環境条件が厳しい場所に成立しているため群落の成長は悪いが、その条件に適応した形で成立している。また、より条件の厳しい場所に成立している、高山ハイデ・風衝地植物群落、湿田・雪田植物群落、自然ササ草原も、群落構造に変化は認められず、本保護林は良好な状態で維持されていると評価される。</p>
飯豊山周辺森林生態系保護地域	<p>○下越森林計画区側は、平成 25 年度のモニタリング調査によれば、前回調査と比較して大きな変化は確認されていない。本保護林を代表する森林植生であるブナの優占した植物群落は、低標高地から高標高地にわたって分布し、次世代を担う亜高木・低木も含め、健全に生育して正常な更新が行われ、保護林は良好な状態で維持されていると評価される。また、稜線付近に成立している、自然低木群落、ミヤマナラ群落、ササ自然草原についてもブナ群落と同様に、良好な状態で維持されていると評価される。</p> <p>○会津森林計画区側は、平成 27 年度のモニタリング調査によれば、前回調査と比較して大きな変化は確認されていない。本保護林を代表する森林植生であるブナ、ダケカンバの優占した植物群落は、環境条件が厳しい場所に成立しているため群落の成長は悪いが、その条件に適応した形で成立している。また、より条件の厳しい場所に成立している、自然低木群落、雪田植物群落も、群落構造に変化は認められず、本保護林は良好な状態で維持されていると評価される。</p>
奥会津森林生態系保護地域	<p>○平成 27 年度のモニタリング調査によれば、前回調査と比較して大きな変化は確認されていない。本保護林を代表する森林植生であるブナの優占した植物群落は、環境条件が厳しい場所に成立しているため群落の成長は悪いが、その条件に適応した形で成立している。また、より条件の厳しい場所に成立している、自然低木群落、湿田・雪田植物群落、</p>

	自然ササ草原も、群落構造に変化は認められず、本保護林は良好な状態で維持されていると評価される。
喰丸峠ケヤキ遺伝資源希少個体群保護林	<p>○平成 27 年度のモニタリング調査によれば、昨年度の基礎調査では、マイマイガの大発生継続により、ケヤキの活力が低下し、ケヤキ林としての存続が危ぶまれる事態に発展することが懸念された。基礎調査を行った 7 月下旬は、二度吹き目の状態で、盛夏から晩夏にかけて、さらなる食害が及んだ可能性がある。しかし、今年度の本調査では、既に蛾の大量発生は収束しており、ケヤキの葉量の低下も認められなかった。このため、保存対象樹種であるケヤキの老木、亜高木は、健全に生育し、遺伝資源保全上の大きな問題は生じていないと評価される。また、場所によっては、ケヤキの亜高木、低木も認められており、更新も行われているものと評価される。</p> <p>○本保護林のケヤキ大径木には枯損木も認められるため、数年にわたってマイマイガの大発生が起こり、このような食害が継続するような事態となれば、ケヤキ林自体の存続が危ぶまれるものと考えられる。</p>
龍ノ山ヒメコマツ遺伝資源希少個体群保護林	<p>○平成 27 年度のモニタリング調査によれば、保存対象樹種であるヒメコマツの高齢木や中齢木に病虫害、気象害、虫害、動物被害等は見受けられず、現段階では健全に生育している。しかし、林内に、低木・稚樹、実生は少なく、ヒメコマツ群落の更新は停滞しているものと評価される。ただし、ヒメコマツは陽樹のため、通常、林下での更新はないものと考えられ、林下での更新よりも、種子散布により、尾根部や急傾斜岩角地に新たに出現した裸地などで更新していくといった特性を有するものである。このため、高齢木が健全に生育し、次世代を担う亜高木も生育しているといった点で、林木遺伝資源の供給源としての重要な役割を果たしていると評価される。</p>
飯豊スギ希少個体群保護林	<p>○平成 27 年度のモニタリング調査によれば、保護対象群落であるスギ群落は、胸高直径 65cm 程度の高齢木を筆頭に、様々な幹径のものが混在し、稚樹や実生も見られ、主木、更新木ともに良好に生育していると評価される。なお、ツキノワグマによる樹皮剥ぎ痕が 5% 程度のスギに対して認められるが、大きな被害ではなく、また、動物による森林植生への関与も、植物群落保護林としての森林動態の一環であるため、対策をとらずに推移を見守っていくことが重要であると考えられる。</p>
雄国沼湿原希少個体群保護林	<p>○平成 27 年度のモニタリング調査によれば、本湿原は、保護林台帳からは、再生複合体の見られるよく発達した高層湿原で、ホロムイイチゴ、ヒオウギアヤメなどを多産し、当該地域では特に希少種が多いとされるが、観察が可能な木道沿いは、低木類とヨシの侵入が著しく、低層湿原化、低木林化が進行し、一部には裸地化も認められ、高層湿原的な要素はかなり衰退しつつあるように見受けられると評価される。</p>

23利根下流森林計画区

根本沢シオジ遺伝資源希少個体群保護林	○平成 27 年度のモニタリング調査によれば、保存対象樹種であるシオジの老齢木に病虫害、気象害、虫害、動物被害等は見受けられず、現段階では健全に生育している。また、林内にシオジの中齢木、低木・稚樹、実生も生育している。さらに、老齢木が生育する林分と、中齢～高齢木が優占する林分などが認められることから、保護林内でシオジ林の更新が健全に行われているものと評価される。ただし、全体的に下層植生は貧弱で、土柱が見られるほど。ササはほとんど見られない。ニホンシカの鳴き声、樹皮剥ぎ、萌芽への食害などが見られるため、シカにより下層植生は貧弱になったと考えられる。1～2m以下の低木が少なく、シカによる食害と思われる。
--------------------	---

24伊豆諸島森林計画区

小笠原諸島森林生態系保護地域	<p>○平成 27 年度のモニタリング調査によれば、小笠原諸島においては、林野庁・環境省・東京都の各機関が、外来種・移入種である、アカギ、モクマオウ、リュウキュウマツ、ギンネムなどの木本類や、ホナガソウ、セイロンベンケイソウなどの駆除対策を精力的に実施しているものの、今だ根絶には至っておらず、小笠原諸島を代表する植生域に設定されている森林生態系多様性調査地点においても、リュウキュウマツやアカギの生育が認められるのが現状である。このため、固有の生態系を保全していくためには、今後も駆除対策を実施していくことが重要であると評価される。また、動物類については、小笠原諸島の固有の島嶼生態系を保全するため、様々な外来種や移入種の駆除を目的とした事業が、林野庁、環境省、東京都の各機関により実施され、その効果が見られるようになってきていると評価される。</p> <p>○今までに実施されている帰化動物の駆除対策の実施状況と成果は次のとおり。</p> <ol style="list-style-type: none">① ノネコ・ノヤギ進入防止柵の設置（東平）。平成 21～23 年度にかけて、ヤギ・ネコ柵の工事が行われ、平成 24 年 6 月に完成している。② ノヤギの捕獲。平成 24 年度の段階では、小笠原の無人島でのヤギ捕獲は終了。父島では、東平のフェンス内は捕獲が完了している。平成 24 年度の段階では、駆除開始から 1 年程度ではあるが、一部地域ではノヤギの低密度化により植生変化が見られ、在来植生回復のほか外来植物の侵入拡散が懸念されている。③ ノネコの捕獲。父島の山域でのノネコの捕獲が進み、山域のネコの確認頭数が減っている。集落近くでのネコの対応も進んでいる。④ ネズミ類の捕獲。父島、聳島属島の一部で実施されている。大きな島での根絶技術は未確立（兄島、弟島では、根絶
----------------	--

	<p>に失敗している)。駆除実施後における陸産貝類の生息密度は、2009年に比べ、2010年、2011年としいに生息密度が高くなっており、回復の兆しが認められる。</p> <p>⑤ グリーンアノールの駆除（母島新夕日）。母島新夕日丘でのアノールフェンス内は、ほぼ低密度化を達成した（拠点排除技術は、一定の成果）。</p>
--	--

24伊豆諸島森林計画区

八丁池・皮子平生物群集保護林	<p>○八丁池周辺は、平成27年度のモニタリング調査によれば、保護対象樹種であるブナの老齢木に病虫害、気象害、虫害、動物被害等は見受けられず、現段階では健全に生育している。しかし、林内にブナの中齢木、低木・稚樹、実生は少なく、ブナ林の更新は停滞しているものと評価される。一方で、林内に占めるイヌシデ中齢木の割合は高く、このままブナの更新が停滞すると、将来的にはイヌシデ林へと偏向遷移するものと考えられる。また、シカの食害により下層植生の食害が著しい。5年前の調査時に大部分のスズタケの枯損が報告されたが、今年度も回復は認められず、稗すらない状況にある。</p> <p>○皮子平周辺は、平成27年度のモニタリング調査によれば、高木層を構成するブナと亜高木層を構成するヒメシャラは健全に生育し、今後も、この2段構造の林相は維持されていくものと考えられる。ただし、林内に生育しているヒメシャラについては、やや樹勢の低下したものが認められ始め、今後は、幹径成長と樹幹伸長に伴う種内競争が活発化し、淘汰が行われていくものと考えられる。一方で、著しいシカの食害のため、低木層、草本ともに欠落し、ブナの低木、稚樹・実生はほとんど生育していない状況にあり、ブナ林としての更新が停滞している状況にあると評価される。</p>
白川ウラジロガシ遺伝資源希少個体群保護林	<p>○平成27年度のモニタリング調査によれば、本保護林は、常緑樹である老齢のスタジイに、落葉樹である老齢のイタヤカエデやケヤキが混在する林相にあり、植生遷移上の次世代を担う樹種として、中齢級のアカガシ、ウラジロガシ、カゴノキなどの常緑樹が混生している状況にある。地形的に急峻な立地にあることから、今後は、アラカシ・ウラジロガシなどのカシ類が優占した林相へと遷移が進行していくものと評価される。シカの食害によるものか、急傾斜地に成立している常緑広葉樹林の特性かは定かではないが、草本層の草丈は15cm程度まで、植被率は20%と低い状況にあるが、他の保護林と比較して生育している植物の種類は比較的豊富である。</p>
皮子沢モミ希少個体群保護林	<p>○平成27年度のモニタリング調査によれば、最上層を構成するモミは高齢から老齢木が多いことに加え、多くのものがテイカカズラやツルアジサイにより被圧され、樹勢が低下しつつあるものや、既に衰弱して幹折れを起こしているも</p>

	<p>のが見受けられる。また、シカの食害が著しいため、モミの低木、稚樹・実生はほとんど生育していない状況にあり、モミ林としての更新が停滞している状況にある。現在上層に生育しているモミがつる植物の被圧により枯損し続ければモミ林としての存続が危ぶまれ、雑多な樹種が混在した林分へと後退していくものと評価される。</p>
寒天モミ希少個体群保護林	<p>○平成 27 年度のモニタリング調査によれば、最上層を構成するモミは高齢から老齢木が多いことに加え、既に衰弱して幹折れを起こしているものが見受けられる。また、シカの食害が著しいため、モミの低木、稚樹・実生はほとんど生育していない状況にあり、モミ林としての更新が停滞している状況にある。現在上層に生育しているモミがさらに枯損し続ければモミ林としての存続が危ぶまれ、雑多な樹種が混在した林分へと後退していくものと評価される。なお、また、ヤブツバキクラス域との移行帯に特異的に生育しているブナについては、現段階で生育は良好と評価される。</p>
浄蓮ウラジロガシ・アカガシ希少個体群保護林	<p>○平成 27 年度のモニタリング調査によれば、本保護林は、ヤマザクラ、アカマツなどの落葉高木の老齢木が残存する林相に、シイ・カシ類が混在し、極相状態へと近づきつつある林相を呈している。常緑広葉樹林への遷移の過程を示す林分としての価値が高いと考えられる。また、シカの食害が著しいため、常緑カシ類の低木、稚樹・実生はほとんど生育していない状況にあり、常緑カシ林としての更新が停滞している状況にあると評価される。さらに、本保護林内に残存しているアカマツの大径木については、薬剤注入による樹勢維持のための適切な対策が実施されていると評価される。</p>
しらぬたの池モミ・スギ希少個体群保護林	<p>○平成 27 年度のモニタリング調査によれば、上層を構成するモミ、スギは現段階では健全に生育しているが、高齢から老齢木が多いことに加え、既に枯損しているものが見受けられる。また、シカの食害が著しいため、モミの低木、稚樹・実生はほとんど生育していない状況にあり、モミ林としての更新が停滞している状況にある。現在上層に生育しているモミがさらに枯損し続ければモミ林としての存続が危ぶまれ、雑多な樹種が混在した林分へと後退する可能性があるとして評価される。また、モリアオガエルの繁殖環境として重要な、しらぬたの池の周辺環境については、池側面の斜面からの傾倒枝は好適な状態で水面上に張り出しており、モリアオガエルの産卵環境として機能していると評価される。</p>
長九郎シャクナゲ希少個体群保護林	<p>○平成 27 年度のモニタリング調査によれば、キョウマルシャクナゲ（同）は、常緑広葉樹であるアカカガシの優占する林下に密生して生育している状況にある。このため、キョウマルシャクナゲ（同）の生育状態は良いとは言えず、開花・結実する個体も少ないと評価される。さらには、林内においても、他の常緑広葉樹と競合しており、林下においては、シカによる食害も認められ、稚樹・実生も少ないのが現状である。このため、次世代を担うキョウマルシャクナゲ（同）の生育は停滞しているものと評価される。</p>

黄楊の峯ツゲ希少個体群保護林	○平成 27 年度のモニタリング調査によれば、ツゲの生育地は保護林の北部に限られているが、ツゲの生育地においては、ツゲは、シカによる強度の食害を免れ、良好に生育していると評価される。ただし、保護林内に広く分布しているブナ林については、一部の稜線で枯損の進行が著しく、また、シカによる食害の影響のため、次世代を担うブナの低木や稚樹がほとんど生育していないのが現状である。
猫越ウラジロガシ希少個体群保護林	○平成 27 年度のモニタリング調査によれば、本保護林は、高齢級のウラジロガシが優占し、ほぼ常緑広葉樹によって占められた、極相林としての林相を呈している。しかしながら、林床植生の植被率が低く、次世代を担うウラジロガシなどのシイ・カシ類の稚樹がほとんど見られない状況にあり、常緑カシ林としての更新が停滞している状況にあると評価される。これは、常緑広葉樹林の林床の特性でもあるが、シカの食害による影響が大きく関与しているとも考えられる。